

やや図式的に過ぎるきらいはないか。

渡辺則文・有元正雄「巨大塩田地主の形成と塩の生産構造」は、岡山県児島郡味野町の「塩田王」野崎家の分析。幕末に塩田地主として基礎を築いた同家は、明治中期にかけて利潤を土地集積に投下し、巨大耕地地主として確立、塩と米を結合させた経営形態をとり、その内部で形式的な小作制のもとでの実質的な資本・賃労働制である当作歩方制を展開していく。

以上、いずれも各執筆者得意のテーマばかりであって、紹介者の個人的関心と能力をこえる多くの問題がとりあげられている。要約の不十分や見当ちがいの批評があれば、おゆるし頂きたい。最後に、福尾教授の一層の御健勝と御活躍をお祈り申し上げる。

(朝尾直弘・京都大学助教授)

『日本中世史論集』 A5判三四四ページ
定価二、五〇〇円、『近世社会経済史論集』

A5判三九四ページ 定価三、〇〇〇円、いずれも昭和四十七年七月刊 吉川弘文館発行

『富田林市史』第四巻

このほど「富田林市史」第四巻が刊行された。本巻は全五巻―第一―第三巻本編・第四―第五巻史料編―のうちの史料編Iに当り、市域及び関係深い地域に関する考古・古代・中世・近世(但し近世は村勢及び土地制度)の史料を網羅し収録している。本巻作成には、北野耕平、井上薫、熱田公、竹安繁治、福山昭の諸氏が協力された由であるが、まず市民と学界とが新たな共有財産を贈られたことを喜びたい。

すでに富田林は、昭和二五年市制記念事業の一環として同三〇年四月に刊行された「富田林市誌」(全一卷)を有しているが、今回の企画により我々は一層充実した市史を受取ることになった訳である。

富田林市は地理的には大阪平野の東南部、金剛・和泉山脈を背にして大和川の支流石川の略中央に位置しており、歴史的には中世末期永祿年間に寺内町として、その発展の緒についている。言うまでもなく寺内町とは真宗寺院を中核として町屋を抱え込み、

住民同志が真宗を媒介することによって結合した町場であって、日本歴史上数少ない自生的都市形成の一類型である。富田林もこの寺内町の典型として、戦前より多くの研究者によって注目され、研究対象とされて来た。

本巻中世編に収録されている、戦記・日記類に記された富田林の動向や「興正寺由緒書抜」が語る諸事実は、寺内町富田林の形成過程や構造を探る上で不可欠なものであり、また近世編に収められた検地帳・五人組帳・宗旨改帳を初めとする諸帳簿は、寺内町として形成された富田林の近世における展開を見る上で基本的な素材である。さらに、近世編に掲載されている旧彼方村・錦部村・北大伴村・新堂村・山中田村の同様な帳簿は、近世富田林の町場としての機能・役割を地域的広がりにおいて捉えることを可能にしている。

この様に、本巻には中世末―近世における、町場としての富田林の動向を明らかにさせる基本史料が豊富に盛込まれているが、本巻の意義はそれに留まらない。特に注目

されるのは中世編に取入れられた喜志宮神社文書である。点数にして一三点、天正四年から同一二年における「神田納日記帳」「大乘会方算用状」「神田指出案」等がその主な内容である。これらはいずれも初公開史料であり、この期の社田経営の実体を
知る上で貴重な史料である。とりわけ、天正八年閏三月及び同年九月一三日の日付けを持つ二冊の「下水分社神田指出案」は、根来寺が徴した「指出」として興味深い。

考古・古代編に関しては紹介者の無能力の故に紹介を略させて戴くが、考古編には喜志遺跡・真名井古墳を初めとする遺跡や遺物が七二の図版で鮮明に収録されており、市域の考古時代を居ながらにして想像する楽しみを与えてくれることを付言しておきたい。

思うに富田林は先に触れた如く、寺内町として日本史上重要な地位を占めたが故に、多くの研究者の対象となつて来たが、その半面この地域に関する他の時期の研究が手薄であつたことは否めない。その意味でも本巻に収められた豊富な史料、及び近々刊

行される史料編Ⅱに基づき、考古から現代に至る富田林の総合的な歴史の流れが明らかとされるであろうことを喜ぶと共に、刊行関係者の御奮闘を期待するものである。

(A5判 本文五二二頁 考古図版七二頁 昭和四七年三月 富田林市発行 申込先 市役所内市史編纂室宛) (水本邦彦・京都在学大学院学生)

一九七三年十二月二十五日印刷
一九七三年一月一日発行 定価四五〇円

史 林 (第五六巻第一号)

発行人 史 学 研 究 会

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内

理事長 羽 田 明
振替京都五一五五番

印刷所 中村印刷株式会社
京都市下京区西七条御所ノ内中町五〇